
連鎖～番外

華山楽

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

連鎖く番外

【Nコード】

N0948S

【作者名】

華山楽

【あらすじ】

連鎖シリーズで一度だけ出てきたキャラが主役です。あんまり考えていなかったなので、内容薄いです・・・

第一話 生まれ

俺の父親は『組織』の『術者』だ。

母親は普通の『人間』だ。

俺自身は母親に似たのかまったく視えない人間だった。

父親が居なければ『アチラ』の世界を信じなかっただろう。

しかし、父親は居た。

そういう世界に。

そのため俺は視えなくとも、『アチラ』の世界を信じ僅かながらアチラの世界の事を父親から学んだ。

十六歳を過ぎた頃だろうか…。

ある日突然視えないものが視え、聞こえないものが聞こえた。

一説によれば『そうゆう』力の節目が十六歳だと言われている。

実際俺は、十六歳を境に視える様になった。

その逆もあるそうだが…。

父は戸惑い、母は悲しんだ。

父は自分の苦勞を息子である俺に体験させたく無かった。

だから、俺に全く『力』が無いことを喜んでいた。

しかし、自分の仕事を理解させる最低限の知識のみ俺に教えていた。

そして母は、父の仕事を理解し『待つ女』になっていた。

術者は時に命も危ない。

それを理解し、ただ無事を祈る『待つ女』に。

父だけで母にとっては精一杯なのだろう。

それなのに俺が『力』に目覚めてしまった。

もし、俺の『力』が術者で通用するほどならば母の心の負担はさらに大きくなる。

俺が家を出て行っても、それは同じことだ。

俺はそれを理解し、両親にそのことは黙っていた。

しかし、何時までも隠しているわけには行かない。

だから俺は、父がたまに家で『式神』と呼ばれるモノを出しているとき、大げさに驚いた。

父は俺が視えているのを瞬時に理解し、母はなぜ俺が驚いているのか分からなかった。

そして、俺は全てを打ち明けた。

父はしばらく様子を見て、俺をある家に一ヶ月ほど預けた。

そこに居たのは、俺の両親と同世代の夫婦だけであつた。

その夫婦には子どもがいなく、俺のことを日常生活では、とてもかわいがってくれた。

ただ、食生活や生活習慣についてはかなり厳しかった。

粗食、早寝早起き、そのほか手伝い、学校。

そう、他人の家から学校に通わされていたのだ。

第一話 生まれ（後書き）

終わるのだろうか・・・

第二話 夢

俺は、預けられたの裏の道場で夜俺を預かってくれている夫婦から『授業』を受けていた。

その『授業』は学校ではけして教えてくれないことだ。

父も教えてくれなかった。

父が教えてくれたのは、俺が父の仕事を理解するために必要な最低限の知識だけだった。

しかし、夫婦はそれ以上の知識と体の使い方を教えてくれた。

『力』を持つものが、たとえ術者にならなくても必要な知識だけで膨大な量であった。

それには、筆記用具は必要なくただ、口答のみで伝えられた。

そして、呼吸の仕方から教わる体の使い方。

体の中に流れる『気』のめぐり。

それを感じていかなければならない。

でもそれを俺は喜んで受け入れた。

父に憧れていた。

父を尊敬していた。

父が羨ましかった。

父に近づけている。

それが嬉しかった。

それだけで良かった。

一流の術者になろうとは思わない。

父と肩を並べようとは思わない。

ただ、ただ父と同じ世界を見たいのだ。

そこに居たいのだ。

「お前の『力視』^{ちからみ}をすることになった」

「『力視』、ですか？」

修行を始めて十月ほどたったある日、突然に言われた。

「そうだ」

「『力視』って言うのはね、『靈力』があると確定した人間全てが受けてるものなの」

「それでどの程度『力』があるか『視る』ことになる」

夫婦が交代に俺に説明してくれた。

「それが終われば、私は、術者になれますか？」

父と同じように。

「術者になれるほどの『力』があればな」

「何度か挑戦できるから、気楽にやっていいのよ」

「ああ、緊張しすぎて『力視』が上手くいかず、術者になれる実力があるのになれなかった例も過去にはあるからな」

道にのりはまだまだ遠いらしい。

「はい。分かりました」

「それまでは、一人で今までのことを復習していてね」

「一人で？」

「そうだ、その時になれば同行する術者が色々お膳立てをするが、一人で全てをこなさなければならない」

「そのために少し、一人になれておきなさい」

「はい。分かりました」

「どうしてもその時は声をかけていい。しかし」

「私たちからは声をかけることは無いわ。覚えておいて」

「はい」

第三話 現実

「彼は駄目だろうな」

ある夜。

預かっている子が寝静まったあと、一組の夫婦が話をしていた。
「はい。生まれたときからなら、まだ手立てがあつたのですが…」

生まれたときからなら、多少力が弱くても手立てがある。

まだ成長しきっていないうちなら、力の使い方を、流れ方を変えることが出来るし、力のある呪具を使うにしても、早くから慣れ親しんできたほうがよい。

逆に成長しきってから目覚めると難しくなる。

固定されてしまっているのだ。

『力』が『気』が固まっているのだ。

呪具を使うにしても、余程相性のいい物に出会わないとそこそこの力しか出せない。

呪具は新しく創る事も出来るが、ほとんど代々人から人へ受け継がれるものだ。

数も段々と少なくなってきた。

その中から、相性のいい呪具を探すのは至難の業だ。

「遅咲きの花もある」

「それが開花することも…しかし…」

夫の声は諦めがあつた。

妻は目を伏してしまった。

「彼は…」

「ええ…」

「咲くことも出来ないか…」

『視る』事が出来るから『見鬼』であることは判っている。

しかし、それ以上のことになると話は別だ。

『見鬼』とは『視る』ことの出来る人間のことを言う。

「蕾のまま終わるでしょう。よほどの事が無い限り」

「『力視』で開花できれば一番いいのだがね」

土壇場で開花した例は過去に、ほんの数例。

二人の見る限り彼にはその奇跡はおきないだろう。

「……」

「無理か」

「私の見る限りでは……」

『視る』力は夫より妻のほうが上だ。

だからこそ、夫は妻に聞くのだ。

「仕方がないがの……父親に憧れていると言っていたが……」

この家に来たとき、恥ずかしそうにしながら彼が語っていた。

父と同じ場所に行きたいと。

生きて行きたいと。

「同じ場所には立てないでしょう。良くて『組織』の『協力者』……」

「まあ、ここまで『組織』のことを知ってしまったんだ。一生『組

織』にかかわって生きていくしかないがね」

夫婦が彼に教えたことは、彼のこれからの人生選択を狭めてしま
った。

会った時から無理だとはわかっていた。

しかし、彼の情熱が二人の口を軽くした。

いけないことだとは判っていたが、二人は彼の『万が一』を期待
して知識を与え続けた。

「……はい」

「私たちが彼を『かごの鳥』にしてしまったんだね」

「……仕方の無いことです。それも、定めです」

「仕方が無い、か」

「『力』に目覚めてしまった。そして、その『力』が彼の理想には

程遠かった」

妻は知識を与えたことを悔やみつつ、それを受け入れたのだ。

「手厳しいね」

「現実を見ないといけません…私たちは…」

「そうだな…彼が、諦めがつくといいのだがね」

「それは、あの子しだい。私たちに出来ることは見守ることだけ…」

二人はただ祈った。

彼が絶望しないように、と。

「ああ。そうだな…」

第四話 想い（前書き）

なんだか暗い・・・まあ、私が書くお話しで明るいのには無いんだけどね・・・

第四話 想い

新井波の『力見』は一日で終わった。

合格だったわけではない。

再度挑戦することも叶わないほどだった。

同行した術者は三人。

それぞれが、他者の潜在能力を引き出すのに秀でた人間だ。

そろそろ引退を考えるほどの老年だが、『力見』は経験が物を言うので今だ現役の三人だ。

その三人の意見が一致した。

彼は術者にはなれないと。

彼の将来はそこで決定してしまった。

『組織』のことを知る一般人として『協力者』となることを。

彼の理想と現実があまりにも違いすぎる。

彼は嘆き悲しみ、そして、心を歪めてしまった。

それは彼の両親も、彼を一時期預かっていた夫婦も気がつかなかった。

心の中はどうであれ、表面上は落ち着きいつもの生活に戻っていた。

そして彼は、誰にも気が付かれずに『協力者』の『裏側』に行ってしまった。

『表』の『協力者』として活動したことが無いため、『表』では

名前はあがらず、しかし、『裏側』のごく一部の人間には知られた存在として彼は生きはじめた。

そして、彼はある人間の存在を知ってしまった。

その人間は、生まれながらに『力』を持ち十代で『組織』の幹部となった天才。

それだけでは彼は何も思わなかっただろう。

少しは気にするだろうが、かわりがない以上それほど心は動かされないはずだった。

しかし、彼はその人間の存在を知ってから心を闇へと浸しはじめた。

なぜなら、その人間は彼と同世代なのだ。

それが彼の嫉妬心と憎悪を呼び、心を狂わせ始めた。

彼の『裏側』と、その人間の生き筋が交差する。

彼の『裏側』の仕事の一つがその人間と係わってきた。

彼の仕事は『組織』が人工的に創った人間が受精出来るかどうか、というものだった。

彼は定期的に『組織』の施設に通い、外見上はほぼ普通の女の体を抱いていた。

まるで人形のように何も反応しない女を…。

そして、転機が来た。

その仕事をしばらくしなくていいと、通知があった。

暇つぶしにその理由を知るために、何度か施設に行き聞きまわっ

た結果、彼は、彼のことを知ってしまった。
そして、彼が自分のすぐ近くにいる事を…。
しかし、そこで何を思おうとも何も出来はしない。

彼は『組織』の幹部。

自分はただの術者の子ども。
何もできない。

そう『組織』に関わる世界では。
だが、彼は彼に『表の世界』で、『組織』と全く関係ない世界で
なら関われる。

同世代だったのが、彼に幸運をもたらした。
二人は同じ大学の学生だったのだ。
そして、彼と彼は知らぬ仲ではなかった。

おべっかが得意ないけ好かない奴。
彼が彼に持っている印象だ。
別に彼が何かした、という訳ではない。
ただ、彼と彼は共通の友人がいてチョツとした噂を耳にしたこと
があるだけなのだ。

その噂が、『よく休むが、教授達の『お気に入り』で、レポート
や特別講義で単位を取っている』というものだ。
ただ、それだけで彼を毛嫌いしていたわけではない。
その程度の噂なら他にもある。

『あの女は教授に体と引き換えに単位をもらった』とか『あいつ
は学長の親戚だからどんなにサボっても落第はしない』などなど、
たきにわたる。

それらの噂になっている人物、全てを嫌ってはいない。
全く係わりがないため、顔すら知らない人間も多数いる。

しかし、彼は彼を嫌っている。
人間として。

それは、彼は彼なりに噂が本当のことだと認識し、彼が彼にした
たった一つの行動が決定打となっていた。

それは彼の噂を耳にして、そんなに時はたっていない頃だった。
彼の顔と名前はなんとなく一致していた。

そして、その頃彼をしばらく見かけていなかった。

講義がいくつか重なっているから、週に2、3回は見かけていた。
しかし、一ヶ月ほど見ない日が続いた後、教授の研究室などに出
入りしている彼を見かけた。

そして、一度研究室で教授から個人講義を受けている最中に出く
わしたこともある。

その時は何も思わなかった。

（ふーん）

その程度の認識しか持たなかった。

その幾日かたった日、彼は彼とすれ違った。

その時、彼はバランスを崩してしまい手にしていた荷物を落とす
てしまった。

彼と彼は同時に拾い始めた。

「わりい、わりい。ありがとう」

彼はそう言いながら拾っていた。

「先輩なんですね、大変そうですね」

彼は拾ったものを渡しながらか言った。

その拾ったものの中には、彼がレポートのために書いたメモが含
まれていた。

それを、彼は読んでしまったのだ。

「はい」

「ああ、ありがとう」

彼は笑顔でそれを返した。

その笑顔が、冷笑に見えたのは彼の気のせいではないはずだ…。
だが、その笑顔を見た瞬間、彼は彼をなぜか嫌悪した。

ただの勘違いなのか、事実なのかわからない。

彼は彼のその一言と表情で嫌悪した。

きっかけは一瞬だった。

そして彼は彼が『組織』の『天才』であることを知ってしまった。

第四話 想い（後書き）

ごめんなさい。中途半端な終わりがたして・・・

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n0948s/>

連鎖～番外

2011年4月15日00時10分発行